

通りすがりの王子 1

C h i b a y a & M i z u b o

清水春乃

Haruno Shimizu

eternity



エタニティ文庫

目次

通りすがりの王子 1

書き下ろし番外編 加藤たつみ竜海による兄の領分

341

5

通りすがりの王子
1

プロローグ

エントランスを抜けると目に入ったのは、ガラスで囲まれた巨大な吹き抜けだった。柔らかな光が満ちるその中央には、色づき始めた桜の木が据えられており、外界よりもわずかに早い春を演出している。

この春、高校を卒業する私——加藤千速は、両親と兄に連れられて初めての「社交の場」へと向かっていた。しっかりと施されたメイクや、セットされた髪に、少し落ち着かない気持ちにさせられる。いや、落ち着かないのは、このふわふわした真つ白なフォーマルドレスや、履き慣れないパンプスのせいかもしれない。私の社交界デビューだからと両親が気合いを入れて選んだものだ。

今日、都心にあるこの老舗ホテルでは、各業界の企業経営者を集めたパーティーが開催されていた。

経営者同士が業界にとられず友好を深める、という大義名分はあるが、本当の目的は新たなビジネスチャンスを探ること。あるいは、後継者同士の顔つなぎのためなのだ

とか。

会場に入ると、両親はたくさんの知り合いから挨拶を受けた。人がひしめき合う中、飲み物を取るために両親のもとを離れたところで、兄の友人を名乗る男に呼び止められた。「お兄さんに頼まれて呼びにきた」と彼は言う。こんな人目のあるところで、何かが起こるわけもないと油断した私が愚かだったのだろう。会場の隅に誘導されたかと思ったら、強引にドアから押し出された。

右手首を強く握りこまれて、ずるずると人気がない廊下を引きずられる。

もちろん、かなり頑張つて抵抗しているのだが、なかなか振りほどくことができない。やっばり来なきゃよかった……

『高校も卒業したし、千速もそろそろこういった場に出てもいい頃だろう。将来の経営者と繋がりを作っておくのは悪いことじゃない。同じ環境で育った者同士だからこそ、理解し合えることもある』

大手ゼネコン神世建設社長である父は、こう言つて気乗りしない私をパーティーに連れ出した。

確かにこの会場には、「同じような環境で育った者達」——いわゆる、大企業の御曹司や、大物政治家の子弟——があふれていた。

でも、到底理解したいと思えないような人も混ざっていたみたいよ、お父様。

ひとりにならないように釘をさされていたのに、ちよつと油断していた。

今頃、娘の不在に気付いた父は青糞めているのではないだろうか。

私は、握りこまれた手首を見た。

きつと、アザになつてしまう。

これは、このバカひとりですでかしている事？ それとも、それを指示している黒幕がいるのだろうか。

見極めなければ、父が後々この男を糾弾する時に困るはずだ。

男は二十代前半くらいだろうか。派手なネクタイや、これ見よがしに着けた装飾品のせいで少し崩れた雰囲気はあるけれど、身にまとつていている物は一級品のようだ。それにこのパーティーの出席者ならば、それなりの家柄の者のはず。

男の手に爪を立て、足を踏ん張る。ちつと舌打ちした男は更に手首を掴む力を強めた。無駄と知りつつ、私は吐き捨てるように言う。

「こんなことして、無事に済むと思ってるんですかっ」

そこそこ整った顔に薄ら笑いを浮かべた男は、チラリと私を見た。

「もちろんだよ、お嬢さん。僕と君は同意の上、関係を持つのさ。初めてかな？ 大丈夫、ちゃんと楽しませてあげるよ。もしかしたら僕のことを本気で好きになるかもしれない。ああ、僕の両親も君が相手なら大歓迎さ。何といつても、そのために部屋をリザーブし

たのは父だしね。君のご両親は、少々ご不満かもしれないけど、余興で撮ったビデオを見たら……考えが変わるんじゃないかな」

男はそう言つて足を速めた。

それは、アダルトビデオの主演を強要されているって解釈でいいのかしら。

かなり計画的であることがわかつて、ゾワリと鳥肌がたった。

エレベーターホールまであと少し。

強引に引きずられ、履き慣れない七センチヒールがぐらつく。

エレベーターに押し込まれて人目が無くなったら、何をされるかわからない。何とか隙をつかないと。

足がもつれたフリをして、私は体を少し前に倒した。

男の手が緩んだ瞬間、両手を組み、思い切り体重をかけて男の鳩尾に肘を叩き込む。

「……っぐ」

手を離し、呻いて前かがみになった男の首筋に、今度は手刀を振り下ろした。

お嬢様の危機対応能力を侮るなよっ！

コレに近いことは今までもあったのだ、こういう輩の対応には慣れてる。まあ、コレが最後というわけでもないだろうけど。

男は、どさりと私の足元に崩れ落ちた。

「……オトしちゃった」

放っておいて、いいかしら？ 家族ぐるみでしかたらしいけど、そもそも誰、コレ？

ホテルの人間とか警備員を呼んで事情を説明して、この男を片付けてもらわないと。

ああ、後始末が――

「……面倒くさい」

そう呟いた時。

背後でクククツという笑い声と、パンパンパンと乾いた拍手の音が聞こえた。

「お見事」

ゆっくり振り返ると、足元の男よりも少し若い男が、壁に肩を預けて立っている。

招待状がなければ立ち入れないこのフロアにいるということは、パーティーの関係者なのだろう。

私と同じ年くらい？

彼は、しなやかな動作で身を起こすと、ズボンのポケットに手をつ込み、私を見つめた。百八十を超えようかという長身の体に、仕立てのよさそうなスーツを身につけている。

男の人に対して使うのどうかと思うけれど、美しくて、でもまだ「完成形」じやな

い雰囲気だ。

癖のない艶やかな黒髪がナナメに額を流れ、切れ長の目元に届いている。

「手を貸すまでもなく、自己解決。白馬の王子も間に合わず、って感じだな」

薄い唇は笑いをたたえているけれど、私の手首にそがれた視線は鋭かった。

「……アザと打ち身、かな」

彼はそう呟くと、ゆるりと歩み寄り、倒れた男の体を足でひっくり返して顔を確認する。

「宮内の家の息子か。バカだバカだと思っていたが、本当にバカだったんだな」

それから視線を男の顔から外さないまま、肩越しに指を二本立てて合図した。すると、どこからか黒服のボディガードらしき男が数人やってきて、「宮内の家の息子」を片付けにかかる。

私はあまりの手際のよさに、言葉もなく彼らを見送った。

その姿が見えなくなつてから我に返り、

「……えっと、ありがとう？」

と、隣に立つ自称「白馬の王子」に声をかける。

何だかよくわからないけれど、片付けて頂いてしまった。

ブツと噴き出した彼の右頬に、えくぼが浮かぶ。

クールな印象を裏切る、かわいらしいえくぼの出現に、私は一瞬目を奪われた。

何て、ミスマッチな……

彼はえくぼを浮かべたまま、少し首をかしげる。

「何で疑問形？」

「……見てたんなら助けてよっていう、私の鬱屈うづくした思いが疑問形に……」

私がそう言うのと、彼は「ぶわはははっ！」と大きく笑った。そして私の正面に立ち、不敵な笑みを浮かべる。

「あんた、面白いな。名前は？」

突然、あからさまな好奇心を向けられて、私は戸惑ってしまった。

パーティーにはあまり出ないので、今後、会う機会はそうそうないだろう。けれど、名前を知られるのは気が進まない。狭い世界のことだ。いずれ、どこかで私の名を聞くことがあるかもしれないが、その時に「ああ、あの時の！」と男を一人オトした場面を思い出されてもね。

「王子。そういうことは、自分が姫を救出できた時に聞くものです」

「その姫はえらく強くて、王子の到着を待つまでもなかつたらしいんだが」

「いつ来るかわからない王子を待つって、貞操ていそうを危機に晒さらすなんてナンセンスです」

「では姫。次にお目にかかれた暁あかつきには、名前を——」

王子が一步間合いを詰めてきた。

「是非、名前を教えてください」

私を見つめる強い視線に困惑する。

「——嫌」

彼の言葉を斬って捨て、王子の横をすり抜けようと、わずかに足を踏み出した。

その瞬間、すつと上がった手が、私の耳元を掠かすめてパールのイヤリングをさらう。

取り返そうと手を伸ばすと、王子はイヤリングを高く掲げ、下からそれを眺めながら言った。

「それまでの、担保」

何たる早業はやわざ。あつけにとられていると、王子はニヤリと笑う。

「俺は——」

王子が言いかけたところで、誰かの話し声が聞こえてきた。どうやらこちらに向かっているようだ。イヤリングを取り合っている所なんて見られたくない。変な噂の種になるのは願ひ下げ。

「では王子。名乗るのはお互いに覚えていたら、ということだ」

私は詰められた分、また距離を取って、名乗りを上げようとした王子の言葉を遮せりぞる。

聞いてしまったら、お気に入りのイヤリングを「失くしたこと」を諦められなくて、取り返しに行きたくなってしまふ。

そう、多分お互いに名乗る機会は来ないはず。ご期待に添えなくて悪いけど。

その時の私は、少し意地悪く微笑んでいたと思う。

王子の前をすり抜けてエレベーターへと向かう。視線は感じていたけれど、振り返らなかつた。

私はエレベーターに乗り込むと、扉が閉まる瞬間、目を上げる。

すると、王子が片手を挙げて、うっすらと微笑んでいるのが見えた。

1 そういうことも、あるんです

それから月日は流れ——晴れて新社会人になった加藤千速は、入社式に臨みながら、王子と出会った四年前のことを思い出していた。

結論から言うと、パールのイヤリングはいまだに千速の手元に戻ってきていない。

パーティー会場から突然姿を消した娘が、実は結構際どい目に遭っていたと知った父は、その後、社交の場に娘を連れ出さなくなった。

「必要に迫られるまで出なくていい。わざわざ顔を晒して、同じような危険を呼び込むことはない」

というわけで、あの王子が言う「次にお目にかかれた暁」は、ずっとやってこなかった。千速は、父が過剰なほどに心配する理由をよくわかつていた。自分は色々な意味で人

目を引くのだ。

百六十七センチという、女の子にしては少し高い身長に、大きな猫目。

背中まである茶色っぽい髪は、自然にゆるくウェーブしており、一見ハーフっぽく見えるらしい。

高慢で、気が強そうな女——これまでそう見られることが多かった。

大手ゼネコン会社社長の娘というバックグラウンドも、どうしても注目されてしまう。

そのせいか、千速は外見や環境ではなく、自分自身の価値を認めて欲しいとずっと願っていた。

——こんな庶民とは付き合わないでしょう？

——お高くとまってるのよね。

——だってお嬢様だから。

そんな一言で、たくさんの努力や真摯な思いが片付けられてしまわないように。

お見合いの釣り書きを飾るだけの大学では意味がないと思ったので、付属のお嬢様大学には進まず、一般人試を経て、難関国立大学の法学部への進学を決めた。だが、千速の兄は彼女の交友関係をいたく心配した。

「おとなしく付属の大学に行けばよかったものを……どんな奴がウロウロしているかわからないような所に、何だつてまた行きたがるんだ。そんなに勉強して、誰に何を証明したいんだか」

兄はそう言ったものの、今回選んだ国立大学の方が全くもって安全だったと思う。高校時代の知り合いがたくさんいるその辺の私大に通えば、千速のバックグラウンドに興味を持つ変な輩ややつが、また出てきそうだったからだ。度々兄が大学に乗り込んできて、周囲にいらぬ牽制けんせいをしたせいで、図らずも清く正しい四年間を送ることになったのは、返す返すも残念だったけれど。

就職する時も父が干渉してきた。

「まあ、花嫁修業みたいなものだから、しばらくウチで働くか子会社のどこかでも……。あ、私の秘書とかどうだ？」

のほほんと構える父に、千速はとある会社の内定通書を書いっと差し出した。

「就職先はここに決まりました。お父様もご存知の通り、ウチに勝るとも劣らない一流企業ですからご心配なく。私の社会人生活には、当分口を挟まないでちょうだい。お兄様も」

父の隣で、難しい顔をして内定通書を覗のぞき込む兄にも、念を押しておいた。

というように、いろいろな枷かぎを振り払って、ようやくこの場にたどり着いたのだ。

だが――

食品、日用品を主に取り扱う大手の商社である桜井さくらいコーポレーションの入社式で、千速は自称「白馬の王子」と再会することとなった。

入社式に参加する百名近い新入社員の中で、ひと際目立つ人物――それが誰であるか気付き、千速は青緘あおざめた。

外見や立場に縛られないところで、社会人生活を始めるつもりでいたというのに、うっかり王子の記憶を刺激して、例のパーティーで出会ったどこぞのお嬢様だと気付かれてしまったら……：大学も会社も、自分が社長令嬢だとバレにくい環境を選んできた努力が無くなる。それは何としても避けたい。

そう思ったものの、すぐに思い直す。あれから四年も経っているのだ。

しかも地味なりクルートスーツを身にまとった千速は、銀縁の眼鏡をかけ、髪をきつく一本に縛り、失礼のない程度の薄化粧。学生時代とはだいぶ雰囲気を変えている。むしろ、変装していると言つていいだろう。

遠目に見る王子にしても、相変わらずの美しさだったけれど、当時の未完成な雰囲気は一掃いっしょうされており、ナイフのような迫力で周囲を圧倒していた。そんな彼と同様に、千速の外見だって変化しているのだ。

『お互いに覚えていたら』

王子は、記憶の中の私を、今の私に重ねられるだろうか？
入社式の後、配属先ごとに振り分けられたグループの中には王子の姿。
彼をまっすぐ見つめてみると、視線が返される。そこに、千速を思い出したと思われ
る様子はなかった。

「はじめまして。加藤千速です。よろしく」

千速は安堵し、ゆっくりと微笑んで告げる。

もしかしたら、いつも通りの私でも、王子は思い出さないのかもしれない。

それに……四年も経てば、「名乗る」という約束も時効でしょ？

何の反応も示さない彼を、千速はもう一度見る。少し残念だが、パールのイヤリング
は、もう戻ってこないのだろう。

今年、本社保属になった新人は、採用枠の違う事務職数人を除けば、男女二人ずつの
四人。

細身ながら、身長は百八十センチを超えていそうな王子は、やはり目立つ。

艶やかな黒髪を後ろに流し、その美貌を惜しげもなく晒して、周囲の視線を集めている。
濃紺のリクルートスーツに臍脂のレジメンタルタイをしているのに、フレッシュに見
えないのは何故だろう。

「森瑞穂です。よろしく」

彼は三人に向かって、鋭い視線のまま、にこり、じゃなく、にやりと笑った。

「……えくぼって……胡散臭っ」

千速の横にいた美女が小声で呟いた。

「そんなに威圧しなくなつて、あなたに擦り寄り寄りしたりしないわよ。私は谷口実里。よろ
しく」

ストレートボブの黒髪に囲まれた顔は、とても可愛らしい。だが柔らかな微笑をたた
えた彼女は、美しいピンクの唇から辛辣なセリフを吐いている。

千速よりも少し背が低いけれど、出るところは出ていて、引つ込むところは引つ込ん
でいる羨ましいスタイルだ。リクルートスーツなのに、色っぽい感じがする。

「いや、谷口さん。そのくらい態度をとっていないと、あつという間にいろんなのが
寄つてきちゃうでしょ。僕は常盤司」

「にっこり笑みを浮かべて自己紹介した彼も、王子と変わらないほどの長身で甘い顔立
ちだ。

「で、千速サンとは大学の同窓。学部は違ったけどね」

……そうなのだ。思わぬ誤算が、ここにもひとつ。

自分の実情をそこそこ知る人物が、まさか同じ会社に入社しているとは思わなかった。

彼もその容姿と、ぼわわーんとした口調を裏切る明晰な頭脳で、大学時代ある意味有名人だった。

一般教養でいくつか同じ講義を取っていたこともあり、お互い顔と名前が一致するくらいには知っている。ついでに、外車で正門前に乗りつけてきた兄のせいもあって、彼は千速の素性も把握しているだろう。

面倒な。しかし、ここはあえてスルーだ。

常盤は目をキラキラさせて、「なにになになに、何だってそんな格好しちゃってるわけ？」と、口にしたくてもうずうずしているようだ。

千速は「余計なこと、言うなよ」的な視線を投げてから、微笑んだ。

「奇遇よね」

「それだけっ？」

「あー、そうね、じゃあ、これからもよろしく？」

「……」

大学の同級生である二人の間に微妙な空気が流れる。

その傍らで、自身に集中する女性陣の視線を完璧に無視しつつ、「あの女達は何で見てくるんだ。当たり前だが俺にも常盤にも目は二つ、鼻と口は一つしかないぞ」

と苦々しく呟く王子。

「やだ。パーツの数の問題じゃないのよ。配置の問題でしょ、それは」

そう言っつて、イラつく王子を茶化す谷口。

容姿といい発言といい、とにかく周囲の視線を集める人達に囲まれ、千速は心の底から願った。

——お願い、私を巻き込まないで。

本社に配属される新人社員は一週間の集合研修を受けた後、数ヶ月に渡ってそれぞれ各部署を研修で回る。それらを終えてから、正式な所属部署が決まることになっていた。千速はその研修の間、王子が寄せられる好意を微笑みながらも完璧に無視し、果敢にアタックする女子達を容赦なく蹴散らしていく様を目の当たりにした。

彼曰く、

「こういうのは、変に期待を持たせたらいけないんだ。二度とトライしようなんて思わないくらい、完膚なきまでに叩く」

すると、それを聞いた谷口が同情するように言う。

「今までの凄まじい日常を垣間見るようなセリフだね。あのハンパ無い威圧感、自己

防衛のためだったか」

その言い方から考えるに、彼女も今まで似たような苦勞をしてきたに違いない。三ヶ月の研修を経て、最終的に千速と王子が営業部、谷口が秘書課、常盤が企画部に配属となる。

その頃には四人の中に同期の絆きずなのようなものも出来上がっていて、時々飲みに行ったり、仕事の愚痴ぐちを言い合ったりするようになっていた。

人目を引く三人と一緒にいるといつも賑にぎやかな一方、千速は集団に埋没まぼぼする居心地の良さを満喫していた。

2 ありふれた日常

社会人三年目。加藤千速は、有意義な毎日を送っている。

入社した時から変わらず銀縁の眼鏡をかけ、髪をキッチリ後ろでまとめ、地味なスーツをまとっていた。華やかな女子社員が行きかう社内では実に目立たない、ただのＯＬだ。千速がやっている営業の仕事は、端的に言えば、売れそうなものを探して、それを売ってくれそうなところに売ると売るといふものだ。

メーカーが持ち込んだできたものを、小売店に仲介することもある。

売れるものを見極めるセンスも必要だが、価格や生産量についての交渉力、販売スタイルの提案力なども求められる。

千速の所属する営業一課が主に扱うのは、日用品だ。ニーズが見込める雑貨おろを卸すだけでなく、外部から持ち込まれた企画を商品化したりもしている。

日中は外回りが中心で、帰社後はプレゼン資料や書類作成に忙殺ぼうさつされた。それこそ終電なんてザラだ。

忙しくも、充実した日々。

父の秘書なんてやっていたら、きっと得られなかっただろう達成感。

頼れる上司に、気の合う同僚にも恵まれ、千速はこの生活にもものすごく満足していた。たった一点を除いて……

「ただ今戻りました」

夕刻、王子が外回りから戻ってきた。

そう、彼こそが、千速の充実した「普通の社会人生活」を乱す原因だ。

際立きわつた容姿で入社当時から注目の的だった王子は、有能さにおいても他者の追隨ついでを許さなかった。

これはもう目立つなと言うほうが無理な話で、今ではあらゆる部署の女子社員に狙われている、いわば甘い蜜のような男なのだ。

甘い蜜には、当然美しい「蝶々」が寄ってくるもの。彼女達はとても貪欲だ。

谷口実里——実里は「秘書である」という事実と、その容姿で、彼の側にいることを洪々容認されている。しかし、課が違えど同じ営業部に属し、席も近い千速は、彼女達にしてみればとても目障りらしい。地味なくせに、キラキラ王子の側にいられるのが悔しいのだろう。

この二年間、千速は陰に陽にその「蝶々」達に絡まれてきた。

例えば、「必要以上に森さんに近付かないで」と警告されたり、あるいは「あなたみたいな地味な女、森さんが相手にするはずがないんだから、勘違いしないでよね」と詰め寄られたり。

時にはロッカールームで、あるいは休憩室で。

その度にただの同僚だと説明するのだが、毎回ものすごい疲労感に襲われる。

ここは、仕事をする場ではないのか？

そして、それは私に言って効果があることなのか？

いったい、私に何と答えろというのか。

実のところ彼女達が、そうやってわざわざ千速に釘を刺してくるのには理由がある。

ひとつは、彼に隙がないから。

入社当時の威圧感の鳴りを潜め、人当たりは良くなったものの、それでも彼は他人を必要以上に寄せ付けないし、踏み込ませない。

直接本人にアプローチできない分、彼の周辺にある目障りなものを排除する方向にエネルギーが向かうらしい。

理不尽なことに、その対象となるのが彼の近くにいる千速なのだ。

もうひとつは、千速がプライベートで彼を「瑞穂」と呼ぶから。

入社当初から頭一つ抜きん出ていた王子に負けまいと必死だった頃、彼に唐突に言われたのだ。

「……瑞穂」

「はっ？」

「プライベートでは瑞穂でいい。俺も千速って呼ぶから」

「はあ……何で？」

「まあ、仕事をする上での仲間意識みたいなものか？ 同じ土俵で戦っているっていう。学生じゃないから、馴れ合いで名前を呼ばれるのは許さないけどな」

どうやら瑞穂には確固たるマイルールがあって、それは友人と認めた人間は名前で呼ぶというものらしい。千速が彼のお眼鏡に適って、仲間認定された瞬間だった。

多分、他の女性達みたいになびかなかったのが一番大きい要因じゃないかと思う。やがて、千速だけではなく本社配属の同期四人は、プライベートではお互いを名前前で呼び合うようになった。だが、蝶々達は地味な千速がその輪に入っているのを認めたくないらしい。

事件は、ありふれた日常のひとつコマから始まった。

定時を過ぎると、外回りから帰社した営業社員が次々と事務処理を始める。その中で、千速も瑞穂もそれぞれの仕事に追われていたのだが――

「森さん」

急に可愛らしい高い声が響き、営業部フロアのざわめきが途絶えた。

営業部は課ごとに机を固めて島を作っているものの、仕切りはないのでフロア全体の見通しがいい。瑞穂とは課が違うが、席は通路を挟んだ斜め前なので、彼の状況はよくわかった。

見ると、瑞穂の後ろに栗色の巻き髪の小柄な女の子が立っていた。

大きな二重の目に、長い睫毛。厚化粧に見えない、でもしつかりメイクを施した綺麗な顔。

ピンクのカーディガンに、オフホワイトのシフォン地のスカートを身にまとった彼女

は、まさに「可愛い」を体現した姿だ。

おぉっ！

自ら狩りに来るとは、本日の蝶々は何と大胆な。

だが、彼女が声をかけた瞬間、瑞穂の周囲の気温がぐっと下がったのがわかった。怖っ。

千速は、何も見なかった聞こえなかったフリで自分の仕事に戻る。

周囲の人間も彼が不機嫌になったのがわかったのだろう、再び飛来した蝶々に関心を失ったように、仕事の手を動かさ始めた。だがその実、皆、瑞穂達の成り行きを気にしているに違いない。

「誰？」

瑞穂の冷たい声が聞こえる。

……そこは「何？」と返すところなんじゃないかな、ミズホクン。と、思わず千速は心の中で突っ込んでしまった。

蝶々は、突き放すような瑞穂の応対にもひるまず続ける。

「えっと、総務の笹川望です。何度か営業の皆さんとの懇親会にも参加させていただいてます」

営業と総務は、仕事の流れ上密接な関係があるので、円滑に業務が回るよう、定期的

に懇親会を開いている。

メールや書類上だけでやり取りするよりも、実際の顔を知っていた方が物事はスムーズに進むというもの。

瑞穂も何度かその懇談会に参加しているが、笹川に見覚えがなかったらしい。本人は人見知りだからと言うが、単に他人に無関心なだけなのだろう。

彼女は先輩社員だけど、事務職採用の短大卒なので年下の二十三歳だ。

笹川専務の姪で、専務の縁故採用であることを隠しめせず、社内の優良物件を軒並み攻略しようとしているらしい。

……ということくらい、私でも知ってますよ、ミズホクン。営業たるもの、情報収集は怠つてはいけないのだよ。

笹川は目を瞬かせ、胸元で手を組んで、助けを求めるように周囲を見回していた。

まさか自分の事を知らない、覚えていないなんて、考えてもいなかっただろう慌てぶりだ。

一般的に「とても可愛い」に分類される、目立つタイプの女の子だから、自分に自信があったのだろう。

そんな彼女に向かって、瑞穂はそっけなく言い放った。

「よく知らない人に、声をかけられるのは好きじゃない」

「ご、ごめんなさい……」

笹川の泳いだ視線が、迂闊にも顔を上げてしまった千速の姿を捉えた。何故か思いっきり睨みつけられる。

勘弁してくれ。私はただの「同期」で「同じ部の同僚」なんですよ。本人が言うところの「よく知った人」ただけなんですってば。

「で、何？」

「あの、お時間があったら、総務の子達と一緒にお食事でも行きませんか？ メールや電話でお誘いしても、なかなかOKしてもらえないので、今日は直接お誘いに来ちゃいました」

それをこの戦場のような慌しさの中で言っちゃおう？

再び周りの音が止んだので、千速がフロアを見回してみると、あらゆる視線が二人に集中している。

……やっぱり皆さん、聞いてないフリで、しつかり聞き耳立ててますね。

「今のこの状況で、君達と食事に行く時間があると思う？」

「でもっ！ きちんとお食事をとらないと、体に悪いと思いますっ！」

それは「あなたのこと心配してる家庭的な女の子」アピールかな？

だが、笹川のその言葉で、瑞穂の周辺の空気が凍る。

「食事はとるよ」

「じゃあ！」

彼女の声に期待が滲む。

「でも、君達とじゃない」

「え？」

「仕事を後回しにしてまで、君達とお付き合いする気持ちがないって事だよ」

「……そんな」

悔しそうに呟いた声が、何を思ったかいきなり千速の名を呼んだ。

「加藤さんっ！」

「……はい？」

突然自分が呼ばれたことを不審に思いながら、千速は手元の書類から顔を上げて笹川を見る。

「あなたからも、森さんに言っただけだよ！」

「……何をでしよう？」

「だからっ！ あなた達と一緒にいると、森さんの交友関係が狭まるばかりだっということくらい、わかるでしようっ？」

それはまあ、本人の自由だと思いますけど。

微妙な表情をしている千速に業を煮やしたのか、笹川は更に言い募ろうとする。

すると――

「いい加減にしてくれないかな」

瑞穂の低い声が割って入ってきた。

「君、笹川さんだっけ？ 君の業務は終わっているんだろうけど、ここにいる皆はまだ仕事中。俺も、加藤さんもだ。机の上の書類の山が見えないか？ そういう周囲の状況に全く配慮できないような人間と、自分の時間を削ってまで一緒に居たいとは思わない」

「ひどい……」

冷たく言い切った瑞穂を見つめながら、笹川は声を震わせる。

「NOをNOと受け取らないで、自分の気持ちだけを押し付けてくるのはひどくないのか」

皆の前で、それは少し言いすぎなんじゃないの？

青褪めた笹川を見て、千速は思わず瑞穂をとめた。

「森さん、ちょっとそれは――」

すると、千速を再び思いっきり睨んだ笹川は、ものすごい勢いで走り去っていった。

「何で、私を睨んでくかな……」

千速はため息をついて、そう漏らす。

「言いすぎだつてば」

瑞穂を軽く睨んで言つてみたが、本人はどこ吹く風とばかりに平然と仕事を再開している。

仕方なく自分も仕事に戻ろうとパソコンに向き直ると、隣に座る後輩の須藤拓真に、面白がるような、同情するようなひとことをかけられた。

「加藤さん、ご愁傷様です。最後のひと睨み、アレ、敵認定でしたね」

——火種は、こんな日常から生まれたのだった。

「今日はこれから内勤でしょ？ 一緒にご飯食べよ」

金曜の昼前、千速のもとに実里から内線が入った。

千速は基本外回が多いが、会議がある日は社員食堂で実里と一緒にランチをとるようになっていた。

業務内容が違う人に話を聞いてもらうだけですつきりしたり、思いがけず問題解決の糸口を掴めたりする。

このランチは、お互いが愚痴を言い、へこんでいるのを慰め合い、ちよつと愉快な話題を共有する大事な時間だった。

しかし、最近ではもっぱら千速が実里の愚痴を聞くことが多い。

実里は、秘書課配属時から常務付き秘書を務めている。当初は鷹揚な常務のもと、厳しい指導を受けながらも充実した日々を送っていたのだが、昨年、新たに就任した常務によってそれが一変した。

新しい常務は、アメリカ支社から帰ってきた社長の息子で、三十代半ばの美丈夫。切れ者と名高い御曹司、桜井誠だ。

実里はそのまま桜井常務付きの秘書となった。が、思えばこの時のために前常務は実里を鍛えていたのだろう。

日頃から実里は、己の仕事への真摯な姿勢と有能さを自負していたのだが、桜井は実里に仕事を任せることをしなかった。あらゆる案件を自らチェックするという、あからさまな不信任。常務交替後は、彼女の口から「あの男……」「あいつめ……」という憎々しげな眩き（くら）がもれることが度々あった。

「悔しいけど、詳しいことは守秘義務にかかわるから言えない……。でもっ！ 私の憤懣（まん）やるかたない気持ち、わかってくれるっ？」

「状況は良くわからないけど、実里の憤りはよく伝わる」

千速は苦笑しつつ、よくそう答えている。

今日はどうやらその上司の愚痴ではないようだが——

実里は席につくや否や切り出した。

「聞いたよー。昨日、笹川さん、直接乗り込んだって？ 次なるターゲットは瑞穂だったか。ちょっと前まで常務狙いで、専務を使って近付こうとするさかったのなんの」

実里によれば、専務の名を出して桜井を食事に誘ったり、専務の身内であることを盾に、アポイントもとらずに押しかけてきたりしていたらしい。しかも待ち伏せて一緒の車に乗り込もうとするなど、かなり傍若無人な振る舞いをしていたという。
あまりにもしつこいのでとうとうキレた常務が、「その席がいつまでも安泰だなんて思うなよ」と専務に詰め寄って、ようやく追い払えたのだそうだ。

「ああ、そういえば笹川さん、何だか空気が読めなさそうだった。というより、あえて読まない感じだった。自分に都合のいい世界に生きている感じがしたな。でも、男から見たらああいうのが可愛いんでしょ？」

千速は宙を見つめながら呟く。

「この世の中にはさあ。綺麗で、賢くて、性格も良くて、仕事も出来るワタシ達みたいな女がごまんというじゃない。ちょっと可愛いくらいで仕事も中途半端な、しかも専務の姪ごときに、百戦錬磨なオトコがひっかかるかっての。身の程を知れ！」

実里が、目の前のハンバーグにグサツと箸を刺して言った。

「……実里、何かあった？」

「何にもないけど、常務を巡っての笹川さんとの攻防を思い出したらむかついた」

「そんなに大変だったんだ」

「そーなのよ！ NOがNOって通じないの」

ぶぶつと千速が嘔き出す。

「同じセリフ、昨日瑞穂が本人に言ってたよ」

今度は千速の言葉に実里が嘔き出した。

しばらく笑い合った後、実里が急に真面目な顔になって言う。

「千速、気をつけなよ。あの女、あなたにも絡んでいったんだって？ あの手合いは、何としても自分は許されるって勘違いしてるから、どういう手に出るかわからないよ」

「やだ、脅かさないで。昨日も須藤君に『敵認定されましたね』って言われて……」

「怖くなった？」

「……じゃなくて、面倒で気が重くなった」

「コレだよっ！」

あなた、やっぱりズレてるって言って、実里が呆れたように首を振る。

だが、これが千速の本音だ。とにかく、瑞穂の近くにいと面倒が多い。

ふと、千速は笹川が来た時のことを思い出して疑問を口にした。

「そういえばさあ、何で木曜なんかを誘ったんだろう？ 捕まえるなら、会議があつて外出しない金曜の方が確実じゃない」

「甘い。甘いなあ、千速。瑞穂みたいな誘っても来るか来ないかわからないヤツに、貴重な金曜を割り当てられるかってハナシよ。金曜は確実な男を押さえといて、昨日の瑞穂はダメもとで誘ってみたってとこじゃない？」

実里がそう解説してくれる。

その程度なの？ それなのにあんな風に、私に絡んできたの？

千速は脱力する。

しかし、実里は「ダメもと」だったと言うが、実のところ、笹川は瑞穂にかなり執着しているのではないだろうか。千速にもあからさまな敵意を向けてきたのだし。

社員食堂でも、チラチラと鬱陶しい視線を感じていたが、だからといって何が出来るわけでもない。千速は取り合わずにいつも通り振る舞うことにした。

実里と別れてエレベーターに乗った千速は、営業フロアで降りた。

エレベーターと一緒に降りた社員は数人いたが、まだ昼の休憩が終わるには早い時間だったためか、皆、休憩室のほうへ歩いていく。

営業部に向かう千速の隣に、ずっと並ぶ人影。

見ると、そこにいたのは営業部の先輩社員、曾根優也^{そねゆうや}だった。

曾根は、スマートな容姿の、やり手中堅営業マンだ。千速や瑞穂とは別の課に所属し

ているので詳しくは知らないが、仕事ぶりが評価されている一方、私生活が派手で、隣に並ぶ女性が短い周期で替わっていくことで有名でもある。

「森君のこと、大変そうだね」

曾根はにっこり笑いながら、話しかけてきた。

ああ、昨日はばっちり目撃していますものね。

千速は歩みを緩めることなく、あっさり流した。

「それでもいいですよ。別に私は関係ありませんし」

「ふうん。でも、いつも一方的に加藤さんが被害を被^{こうむ}っているんだらう？」

「高校生の時なら、許せないって思ったかもしれないですね。でも、ここは仕事をする場所だって、少なくとも私と森さんはわかっていますから。仕事に差し障^{さざわ}りが無ければ、構わないです。鬱陶しいですけど」

「君達がお互いにフリーなのがいけないんじゃない？」

「そういうものなんですか？」

「そういうものです」

曾根は、やけに確信を持って言いきった後、横から千速の顔を覗^{のぞ}き込むようにして続けた。

「どう？ 僕と付き合ってみない？」

千速はあつけにとられて立ち止まり、曾根の顔をマジマジと見てしまった。営業フロアへと向かっているのは、千速と曾根だけだから、こんな冗談を大っぴらに口にするのだろうか。

「誰が、誰とですか？」

「君が、僕と」

「……えーっと、何で曾根さんでしょう？」

「何でって」

曾根が苦笑しながら続ける。

「それは、僕が君に興味があるから」

何を言ってるんだか。傍らにはいつも、私とは正反対の煌びやかな蝶々を置いているくせに。

千速は、大きなため息をつくと再び歩き始めた。

「冗談なら悪趣味です。本気だとしても、曾根さんには興味がないのでお断りします」

「はっきり言うなあ」

曾根はニヤリと笑った。

「でも、そういうクールなところがたまらないな」

そう呟くと、曾根は千速の手首をぐっと掴んで引つ張り、強引に振り向かせる。

「——狩猟本能を刺激されるっていうか」

千速はちよつとムツとした。

何、私を獲物認定しているのよ。誰がアンタなんか狩られるかっての。

「残念ですね。私はハンターなので、狩るのはともかく狩られるのは性に合いません」
 につこり笑って、千速はその手を振りほどこうとした。

が、そのまま体ごと引っぱられ、非常階段の扉の向こうへと押し込まれてしまう。
 何がどうしてこうなっている？

突然の展開に千速は混乱した。薄暗い蛍光灯の下で、握りこまれた右手を見る。

そういえば昔、こんなことがどこかのパーティー会場でも……

デジャ・ヴ——社内の人間が相手じゃ、まさかオトすわけにいかないじゃない。

* * *

昨日の笹川襲来の件は、すでに社内で噂になっているようだ。

外のレストランで常盤司と昼食を済ませた森瑞穂は、本社ビルに戻りながら苦々しく思った。

ああいう、誰かの威を借るヤツには虫唾が走る。しかも、伯父という若干遠いところ

からの「借り物」なのに、あれだけ強気な態度を取れるとは。

専務の姪？

笑えるな。そもそも、そういった類たぐいのものを借りるならば、逆に自分を厳しく律し、その威に見合った振る舞いをしなければならぬのではないのか？

もつとも、そんな風に考えるようなヤツなら、最初からそんなものは借りないか。

「何かまた変なのに目をつけられたんだって？」

物思いに沈む瑞穂に、司が面白がるように言った。

「うるさい」

千速が、自分を巡るゴタゴタに度々巻き込まれていることを、実のところ瑞穂は少々申し訳なく思っていた。

同期四人の飲み会の席などで、瑞穂は千速に「悪いな……」と、ぼそりと謝るのだが、千速はこう言って笑って済ませてしまう。

『ちょっと絡まれるくらいで、実害はないからいい。くだらないけど、瑞穂を想ってそこまで、と思うといじらしく泣けるわ』

ロッカーに悪戯いたづらされたとか、他の部からの書類の上がりが遅くて業務が滞とどまったとか、馬鹿馬鹿しくもタチの悪い嫌がらせの数々を実里から聞いている。だが、瑞穂にはそれを止める手段がない。

司と共にエレベーターで営業フロアに戻ってくると、午後の始業にはまだ間があるせいか、あたりは閑散かんさんとしている。その廊下の中ほどで、千速と曾根が話をしていた。珍しい組み合わせだな、と思っていると、千速が急に曾根に引き寄せられるのが目に入る。

次の瞬間、曾根はそのまま自分の体で押すように、非常階段の扉の向こうに千速を連れ込んだ。

「……！ あのかかー！」

「どうする、連れ込まれちゃったよ」

司が少し焦ったように言う。

曾根の女性関係が少々難アリなのは、周知の事実だ。

瑞穂は急いで振り返り、エレベーターの「上り」ボタンを連打した。

やってきたエレベーターから降りる人を待つのもどかしく乗り込むと、ワンフロア上の階まで行き、急いで飛び出す。

非常階段に通じる扉に走り寄り、瑞穂は少し呼吸を整えると中に入った。

何かを目撃したわけではなく、何かを止めようとするわけではなく、あくまでも偶然、非常階段を下りていく——そして、千速と曾根に声をかけるつもりだった。

曾根から邪魔をしたと恨みをかうつもりはなかったし、自分が絡むことで、またして

も千速に女性社員の妙な敵意が向かうことも避けたかった。

非常階段は人氣がないとはいえ、いつ誰が通るともしれない場所だ。だから大したところにはなっていないと思うが、気が急ぐ。

——千速は不思議な女だった。

配属時は、男のような勇ましい名前前に似合わない地味な女が現れたので驚いた。

その外見から、これは女を捨て、男と張り合おうと頑張ってしまうキャリア志向かと思つたが、それも違った。

男だとか女だとか、そんな枠を軽やかに超えたところに千速はいる、と瑞穂は感じていた。

自分自身の力のみで、高みを目指している——そんな彼女の仕事ぶりを見るにつれて、自分と並び立っているとも思うようになった。

それゆえ仕事で切磋琢磨し合える同志と認め、「瑞穂」と呼ばせている。

その一方で、千速が彼女自身に無頓着であることに、わずかな苛立ちを感じていた。

都心の一等地という場所柄ゆえか、本社勤務というプライドゆえか、派手な女が多い中で、千速は全く目立たない存在だった。

しかし、瑞穂と勝るとも劣らない営業の実力が広く知られるようになると周囲の評価が変わった。地味なスーツに隠されているが、実はかなりスタイルが良いだとか、その

立ち居振る舞いには品の良さが滲んでいるだとか、眼鏡に隠された大きな猫のような目が印象的だとか、そういったことを男性社員が噂し始めたのだ。

それなのに、千速自身はそのことに全く気付いておらず、ある意味無防備だった。

「全く、なんだって俺がこんな風に気を揉む……」

わざと足音を立ててステップを降りていくと、二人の姿が見えてきた。曾根が、建物の壁を背にした千速の手首を掴んでいる。

瑞穂は体の芯がカッと熱くなるのがわかった。

千速の目には、苛立ちと困惑と怒りが浮かんでいたが、瑞穂の姿をみると、ほっとしたような表情になった。

「加藤さん、何をしてるんだ。会議の資料用意するんだろう。時間がないぞ」

瑞穂はそう言って、二人の前を通り過ぎる。

「そうだった。曾根さん、失礼します」

千速は何事も無かったかのように曾根の横をすつと抜け、瑞穂の後に続いた。

曾根の視線を背中に感じながら、千速を連れて非常扉を抜ける。少し離れたところまで壁に寄りかかっていた司が、ほっとした顔をして体を起こした。

三人で一緒に営業部のフロアに向かう。

「もう少し待って出てこなかったら、こっちから突入しようと思つてたよ」

「へ？ あれ？」

千速が目を瞬^{またた}かせ、瑞穂と司を交互に見た。

「やだなー。千速ちゃんが非常階段に引つ張り込まれたの見て、瑞穂が慌てて助けに行ったの。僕は出待ちのお役目でした」

「ああ！ なるほど、見ていたんだ。やけに良いタイピングだと思った」

のんきに答える千速に、瑞穂は苛^{いら}立つ。

「お前、曾根なんか軽々しく連れ込まれてるんじゃない。ワキが甘いんだよ」

「ええー。だって想定外で」

「こういうことは、大抵想定外に起きるものだろうが」

肩を竦^{すく}める千速の頭を、瑞穂は軽くこづいた。

「でも曾根さん、純粹に私に興味があるわけじゃないと思うの」

「どういうこと？」

そう問う司に、千速はフツと笑いながら答えた。

「瑞穂への対抗意識、かな。瑞穂絡みでよく私の名前が上がるから、ちょっと食指^{しよくし}が動いたってところ？」

「何だ、それ」

不愉快な気分で瑞穂が咳^{せき}くと、千速は笑って答える。

「瑞穂はそう思っただけでも、曾根さんは瑞穂を意識してるってこと」

「……」

「瑞穂は『自分がどうありたいか』が行動基準だからね。他の人の動向なんて気にしたこともないでしょう？ でも曾根さんは、たぶんそういうことをすごく気にするタイプだから、瑞穂みたいな目立つ人間にどうしても目がいつちゃうんだらうね」

「言うねー」

司が、その辛口な人物評価に苦笑する。

千速は、そういう細かい人間観察と分析が得意で、仕事でもその能力を発揮している。

「まあ、でもありがとう、助けに来てくれて。正直どうやって切り抜けるかちょっと悩んでた」

「ちょっとかいっ！」

司が突っ込む。

自分より体の大きい男に、力づくで扉の向こうに連れ込まれたの？ 瑞穂は眉間に

しわを寄せ、千速を見下ろした。

「いやあ、さすがに先輩社員オトしたらまずいだらうな、って。あは」

千速は、のほほんと笑って答える。

「……オトすつもりだったのか？」

瑞穂は唸るように言う。

何を言ってるんだ、この女は！ そんなに簡単に、大人の男がオトせるわけ——その瞬間、瑞穂はだいぶ昔、パーティーで捕まえ損ねた少女を思い出す。

いや、そんなことをやってのける女がここにもいるのか？

「……お前に、大の男がオトせるのか？」

「んふ。実技もそれなりにこなすのデス」

得意気に断言する千速に、嘘だろう、と瑞穂は空を仰いだ。

——と、次の瞬間。

「……つく」

「……」

瑞穂と司は首をかしげて復唱する。何と肩を震わせて千速が笑い始めたのだ。どの辺りに笑いのツボがあったのか、さっぱり不明だ。

瑞穂は、先ほどまでの千速に対する心配や安堵、その他もろもろの感情が一気に爆発するのを感じた。

「——お前、これ貸しな」

それだけ言うと、瑞穂は笑い続ける千速をその場に残して足音荒く営業フロアに戻る。「おい瑞穂、ちよっと待て！ 企画の書類を渡しに来たんだよ僕は！」

司が追いかけてくるのがわかったが、足は緩めない。

この波立つ感情が一体何なのか、瑞穂自身にもわからなかった。

* * *

金曜午後の営業部定例会議は、その一週間の成果報告と売上目標達成の追及に終始する。

今週の売上目標は達成されているのか、進捗しんちょくはどうなっているのか？

足りない分は、来週あるいは、近い日程で達成できる見込みが立っているのか？

個人が担当している案件の数から契約の見込みまで、こと細かに報告しなくてはならないのだ。

千速は営業成績が良いとはいえ、良ければ良いなりに更なる成果を求められる。これは営業社員にとって避けては通れぬ道なのだが、会議を終えた後はどうしても皆殺気立ってしまう。

しかし、今日の千速は会議が終わった後でもちよっと機嫌が良かった。

男に無理矢理非常階段に連れ込まれるといった、本来ならば「不愉快」に分類される一件が、騎士を連れた王子の出現で、どうってことのない出来事になったのだ。

そう、今回、王子は格好良く助けてくれた。しかも、門の外には騎士まで控えていたなんて。

そう考えるとおかしくなってしまっただけ、思わず笑ってしまったのだ。

瑞穂の機嫌を損ねてしまったようだけど、どうしても笑いをこらえられなかった。思いつくと今も口元が緩む。

週明けの月曜日は、少し大きな契約を結ぶ予定だ。

そのための最終プレゼンの資料作りをしなければならない。諸々の雑事も含めて追われるように仕事をこなしていると、いつの間にか終業時間が過ぎていた。

「おい、そろそろ終わるか？」

いつの間にか側に来ていた瑞穂に、声をかけられた。

「え？ ああ、うん」

腕時計を見ると、時刻はすでに七時を回っている。

「今日の今日で何かがあるとは思わないが、用心したほうがいいだろう。司や実里も誘った。久々に皆で飲みに行かないか？」

曾根に用心するためにも、皆で一緒に行動しようと誘ってくれているのだ。

「うん……でも、瑞穂達と飲みに行つたなんてバレたら、それはそれで面倒臭そうだな」

「こんな時間じゃ、あいつら残ってもいないだろうよ」

瑞穂が言う「あいつら」とは、蝶々達のことだ。確かに彼女達は週末のこんな時間まで会社に残っている人種ではない。

どこぞの優良物件と、合コンを楽しんでいるのだろう。

千速は瑞穂に急かされて帰り支度をする、エントランスで司と実里に合流して近くの居酒屋へと向かった。

……普通の居酒屋なのに、目立つ。

いや、普通の居酒屋だから、目立つのか？

誰がつて、もちろん瑞穂だ。いや、司もだし、もつと言えば、実里もだ。

この席、絶対目立ってるって！

しかし他の三人は、周囲からの視線をもともしない。完全にOFFモードだ。

ビールやらつまみやらが運ばれてきて、軽く乾杯をした後、今日の千速連れこまれ事件の顛末を聞きかじっていた実里が喰いついてくる。

「で？ 曾根さん何だって？」

「付き合わないかとか、狩猟本能がどうか言ってたねー」

「何だと？」

瑞穂の視線が鋭くなる。

怖っ。何で瑞穂が、私を睨むのよ。

「やだな、瑞穂。ちゃんと断ったつてば。そもそも私が簡単に狩られるようなタイプに見える？」

千速が能天気と言うと、司がため息をつく。

「千速ちゃん……僕達は君の事をよく知っているから、あり得ないってわかるけど、君が簡単に狩られちゃうウサギさんに見えている人もいるんだよ。だから無謀なハンターが君の周りをうろついちやうわけでしょ？ それで竜海さんだつて、心配するあまりエントランス前に車を横付けしちゃうんじゃない」

「……スiskon兄のことには、触れないで」

千速はくつたりテーブルに上半身を倒した。

竜海は、千速の五歳上の兄だ。彼は「絶対社会人生活に干渉しないこと」と千速が念を押したにもかかわらず、会社にまでいらぬ牽制をしようと時々やってくるのだ。

せっかくその他大勢に紛れて上手くやっているのに、悪目立ちする兄にウロウロされたら元も子もない。

ちなみに司は、大学当時から千速に干渉してくる竜海の姿をよく見ていた。

だから「千速ちゃん。お・む・か・え・だよー」と、竜海の登場をこっそり教えて

くれたりするのだ。そのたびに千速は慌てて、携帯に電話して追い払ったり、別の場所に移動させたりして、何とか回避に成功している。

「え？ なになに？ 千速の周りつて、何でそんなに愉快なことばっかりなの？」

シスコンのお兄様、見てみたあーい！ と、実里が目をキラキラさせて身を乗り出す。「……実里。アンタと常務の間にも愉快なことがいっぱいあるみたいじゃない」

千速が話を振ると、途端に表情を険しくした実里の目が憤怒に燃えた。

「あの男、私に何をさせていると思う!? 公私混同もいいところよ。私はギリシヤ人富豪の秘書かつっの。ロシア人でもいいけど」

すると、瑞穂がつまみを口にしながら面白そうに促す。

「何だそのギリシヤ人とかロシア人とか」

「瑞穂は読んだことがないだろうけど、某有名ロマンス小説の王道設定よっ！」

「ええっ！ 実里ちゃん、もしかして桜井常務に手を出されちゃったとか——」

青褪める司の頭に、パコンと実里のゲンコツが飛んだ。

「んなわけないでしょうがっ！ あんな鬼畜俺様野郎に喰われてたまるかっ！ 私がしているのは、美女達にプライベートな花束を贈ったり、ディナーを予約したり、お別れのジュエリーを選んだりするくらいですっ！」

「お別れのジュエリー……」と瑞穂は繰り返して、おかしそうに口元を歪めた。

その後、鬼畜で俺様な人物を肴に、宴は大いに盛り上がった。
同期と気安い時間を過ごすうちに、昨日や今日の出来事でささくれ立っていた千速の心は穏やかになっていった。

* * *

午後十時を少し過ぎて、飲み会はお開きとなった。

「じゃあ、また来週」

店の前で別れ、千速と瑞穂はJ Rの駅へ、実里と司は地下鉄の駅へと向かう。

「あんまり酔ったところを見たことないな。酒は強いのか？」

ビールやらカクテルやらをそこそこ飲んでいたようだったが、傍らを歩く千速は少し頬を上気させ目を潤ませているものの、足取りはしっかりとっている。

そういえば今まで千速が酔った姿を見たことがない。

ちなみに瑞穂はかなり酒に強いので、多少飲んでも顔色ひとつ変わらない。

千速は、瑞穂の問いに少し考えこむようにして首をかしげた。

「そうねえ。それほど強くはない。けど、自分の適量ほどのくらいかを教えこまれたから」
「は？」

「父と兄に、女はそれくらいわきまえていないと危ないからって」

だから、これ以上飲んだら危ないって量が自分でわかるのよ、と千速は笑った。

「それは、すごい家族だな」

「そうなの？ ああ、でもその訓練中は結構大変だった」

「訓練？」

「うん。どのくらい飲んだら酔って、体や判断力に影響が出るかを試すの」

「……」

「ビールは、お腹がいっぱいになっちゃって、酔うほどにはならなかったなあ。日本酒とワインは、結構きた。あつという間に酔っちゃうし、翌日が辛かったの何の。サワーとかカクテルとかもやったわよ。『いいか、オレンジジュースみたいに見えるけど、味が違うだろう』とか『きれいな色に騙されるな』とか、どのカクテルが危ないか、兄がしつこくレクチャーするわけ。『これなんか飲みやすいから、とか言われても手を出すんじゃないぞ』なんて言ってたかな。それって、自分が使った手じゃないのかしらねえ？」
ふふふっと笑って、「瑞穂もそんな手を使ったことある？」と千速が悪戯っぽく見上げてきた。

だがすぐに、「瑞穂ならそんな手を使うまでもないか」と一人納得して、「うちの兄は女の敵なのかしら？」と首をかしげた。

「どうやら、千速は酔っているらしい。いつもよりも口数が多い。しかも、普段あまり語ることのない家族のことを口にしてる。」

「千速は大事にされているんだな。……じゃあ、その格好は親父さんやお兄さんに言われてしているのか？」

瑞穂は不思議に思った。

シスコンの兄の振る舞いや、この訓練の話を聞くに、どうやら千速の家族は彼女に必要以上の干渉をしているようだ。

それなのに、自分の娘、あるいは妹が、こんな地味な風貌ふうぼうをしていることを容認するだろうか？

千速は何のことを言われているのかわからなかったらしく、自分の格好を見下ろして、しばし沈黙する。

それから、「ああ、これねっ！」と気付いて、うんうん、と頷く。

「これはね、私のお仕事バージョンなのよ。清潔感があって機能的。仕事をするのに充分だから」

千速はそう明るく言ったものの、次の瞬間、俯うつむいて声を落とした。

「——瑞穂はさあ。皆に注目されて息苦しくならない？」

話の展開についていけず、瑞穂は戸惑った。

しかし、やはり千速は酔っているのだと改めて思い、おかしくなってくる。

前後不覚にはなっていないが、感情のコントロールが難しくなっているようだ。

酒の飲み方を仕込んだはずの親父さんやシスコン兄は、さぞかし渋い顔をするだろう。

「仕事でもプライベートでも、瑞穂は良くも悪くも関心を集めちゃうでしょう？」

しんどくならない？ と千速が視線で問う。

その視線をまっすぐに受けとめて、瑞穂は口元を歪めた。

「——俺は俺だからな。必要以上に注目されるのは煩わづらわしいとは思うが、他人にどう思われようと関係ない。俺が何をしたいかが俺の行動基準なのは、お前も知つての通りだ」他人の視線に踊らされるなんて愚おろかなことだ。大事なのは、自分が何を目指しているのか見失わないことじゃないか？

日頃思っていることをそのまま口にして笑うと、いつもの千速が戻ってきた。

「うわっ、その食えない笑顔にえくぼ、うさんくさっ。しかも、さり気なく俺様発言とか信じられない」

「千速もそうだろう？ お前も、お前自身が行動基準だ。ブレなくて潔けつい。……ところ、さつきから俺の関心をいたく引いているのは——」

そろそろ駅が見えてきた。別れる前に是非とも確認しておきたいことがある。「『お仕事バージョン』じゃない千速はどんなものかってことだ」

ハッとしように、千速は瑞穂を見上げた。

ほのかな酔いが、一瞬にして飛んだのがわかった。

立ち止まった千速は、呆然と瑞穂を見上げている。

千速のこんなに動揺した顔は見たことがない。

思わず千速の少し上気した頬に手をやり、「大丈夫か？」と聞くと、銀縁の眼鏡の奥にある大きな目が見開かれた。

——邪魔だ。

この眼鏡は邪魔だ。

直接、彼女の瞳を見てみたい。

瑞穂は頬に添えた手をゆっくり動かし、眼鏡に触れる。

すると、我に戻った千速が眼鏡を押さえ、慌てた様子で後ろに身を引いた。

「姫の素顔を見られるのは、王子様だけなのよ。瑞穂じゃまだまだ力不足ね。さ、早く帰らなくちゃ。シスコン兄が玄関先で仁王立ちしてるかも」

その場の雰囲気を一変させるように、千速はことさら冗談めかして言うのと歩き始めた。瑞穂は手を下ろしてポケットに突っ込むと、千速の望む通り、何もなかったように話

を合わせ横に並んだ。

「この俺様に対して力不足とは、どの口が言うかね」

駅のコンコースで千速と別れてから、瑞穂はしばらく物思いに沈んだ。

先程のあの雰囲気は一体何だったんだろう？ 自分が何をしたのか良くわからなかった。

電車に乗り込んでからも、思いは迷走する。

千速のことは確かに気に入っている。

今までこんな風に、自分の心に引っかかる女はいなかった。

自分の外見や立場ゆえ、まわりつく女達は多かったし、それなりの関係を楽しんでもきた。

しかし、自分の心がちりと爪を立てられるような、そんな存在に出会ったことはなかったのだ。

いや。

一度だけ。

かつて一度だけ、一瞬にして瑞穂の心を捉えた少女がいた。だが、彼女はあっさりとその手をすり抜けていってしまった。

瑞穂の記憶の奥で、何かがしきりと囁ささやいている。「思い出せ」と。何か引つかかっ

ている。

でもその囁きは、瑞穂が捉える前にまたその奥へと立ち帰ってしまい、何もつかめないもどかしさはかりが残るのだった。

このとき、二人のやり取りを遠くから追い続け、睨む人影があったことに、彼らは気付いていない。

「……こんなの、許さない」

駅のコンコースで別れる二人の後ろ姿を唇を噛み締めて見届けたその人物もまた、人ごみに紛れてプラットホームへと消えていった。

3 降りかかった火の粉の払い方

「……か、加藤さん！ 大変です、会議室がキャンセルされてますっ！」

月曜午前中の定例会議を終え、午後に控えた契約の準備をしていると、千速の隣に座る須藤が突然叫んだ。

ここ数ヶ月千速が携っていた大きな案件が、今日の午後、契約調印される予定だった。

先方の担当者が上司と共に来社し、こちらも千速の上司やサポート役の須藤が同席する。

午前中の会議に入る直前に確認した時には、一時からC会議室がちゃんと押さえられていたはずだ。千速が時計を見ると、時刻は十一時半を過ぎている。

千速は須藤の席の後ろに立ち、社内システムが立ち上がったパソコンの画面を見た。

この会社は、社内システムで本社ビル内の全ての会議室が時間ごとに予約できるようになっている。更に、全社員が各会議室の使用目的と使用申請者名を閲覧することもできる。

C会議室は一時から、企画部が申請したとされる「経営企画会議」で押さえられていた。どういうこと？ 千速は唇をかんだ。

とりあえず急いで他に会議室の空きがないか、画面をスクロールしてチェックする。

案の定、全て埋まっていた。

「ど、どうしましょう、加藤さん。総務に連絡して……いや、企画に連絡して調整を——」
「待って」

動揺する須藤にチラリと視線を投げる。

「今からじゃ、確実に調整できるかわからないし時間もないわ」

青褪める須藤に、千速は薄く笑いかける。

「——大丈夫。いざとなったら近くのホテルの会議室を押さえればいいだけなんだから。須藤君が気がついてくれて良かったわ。先方が来社してから場所が取れてないってわかったら、洒落しゃれにならなかつた」

しかし——どうしてこんな事態になったのか。

会議室や物品の予約などは、社員のIDを使った社内システムで管理されている。

今回の場合、予約した本人か会議室の管理を任されている総務部のIDがなければ、勝手に予約をキャンセルすることは出来ないはずだ。

つまり、だ。

千速でない以上、これは総務の誰かの仕業ということになる。

——小賢こざかしい。

朝イチでなく、千速が会議に入ってから細工するとは、相手はよほどの悪意があるらしい。

「……須藤君。身に降りかかった火ひの粉こはね、火傷やけどしないように全力で振り払うのよ」

「は、はい」

千速は唇を指で叩きながら呟つぶやく。

「社内で場所を押さえて、犯人の鼻をあかしてやる」

しばらく思索すると、千速は秘書課への直通の内線かけた。

役員会議室だけは秘書課が直轄で管理しているので、社内システムに載らないことを千速は知っていた。

「もしもし、実里？ 忙しいところにごめん。今日の午後、役員会議室空いてるかな？ 小会議室……そう。空いてる？ じゃあ、部長経由で会議室使用の申請を常務に上げるから、それまで仮押さえしておいて」

千速は、平素ものすごくフラットな人物である。

忙しい時にも、疲れている時にも、周囲に与える印象は「淡々としている」の一言に尽きる。

ただそれは、己おれの感情を周囲に撒まき散らす事を良しとしないからであって、本来の千速は激しい気性の持ち主である。

攻撃されれば真っ向から戦うし、戦うからにはもちろん全力で勝ちに行く。

内線を切った千速は、須藤に向き直る。指示を出す声は荒らげているわけではないのに、ナイフのように鋭かった。

「まず会議室はOK。私は久世課長に報告して、それから部長に会議室の使用申請をしてもらう。須藤君には別にやってもらうことがあるの。システム管理部に連絡して、今日の午前中に社内ネットワークを使った人の記録を出してもらって。それと、私のメールの履歴も。これも課長にお願いして後から依頼を出すようにするから、先に手配して」